

「モサラベ」という言葉の歴史と変遷

ヤスミン・ビール＝リヴァヤ
(テキサス州立大学)

阿 部 俊 大 訳

論文概要：モサラベという言葉は、「アル＝アンダルス（イスラーム・スペイン）と中世のスペインにおいてキリスト教徒・イスラーム教徒・そしてユダヤ人たちと調和の内に生活していた、アラブ化されたキリスト教徒たち」というロマンティックなイメージを魔法のように想起させる。しかしながら、この言葉はしばしば、使用の目的や研究の種類、執筆者の個人的な観点などによって、様々に異なる使われ方をしてきた。モサラベという言葉の時に矛盾した使われ方が、この言葉の定義を曖昧にしておき、研究者はその言葉を使うたびに、定義の明確化を求められる。この論文において、著者は学界と史料の双方において、モサラベという言葉がどのように使われてきたかを追跡し、それらの用法がいつ現れたのか、またそれらが未来の学界にどのような可能性を与えるのか、解明を試みている。

1. イントロダクション——モサラベのルーツについての議論

アラブ化されたキリスト教徒を意味する、モサラベという概念は、当初は曖昧で単純なものだった。しかし、アル＝アンダルスの——また中世イベリア半島全般の——多言語的・多文化的な成り立ちを考えると、誰が、どの都市において、何世紀に、この「アラブ化されたキリスト教徒」の共同体に属していたか判断することは、極めて複雑な問題となる。ここで、モサラベの定義の問題に取り組みたい。

モサラベを定義する最も単純な方法は、彼らを「8世紀から15世紀ま

で、イスラーム勢力の支配下で生活していたキリスト教徒たち」とすることである。この場合、イスラーム教徒による支配を受け入れていたか、それに抵抗したかの区別はされない。また、彼らの出自も論じられていない¹⁾。とはいえ、多くの人、特に19世紀の〔近代歴史学の〕初期の研究者たちにとって、「モサラベが西ゴート王国に由来する」という考えが非常に重要であった。彼らはその関係性を、スペインのナショナル・アイデンティティを構築するために利用したからである²⁾。

モサラベを西ゴートの過去と結びつける見方と同じくらい重要なのが、モサラベたちが、キリスト教徒でありながら、北方のキリスト教諸王国に住むよりもイスラーム教徒のテリトリーであるアル=アンダルスに住むことを意図的に選択したという見方である。『オックスフォード スペイン文学必携』では、モサラベを以下のように定義している。“アンダルスのイスパノ=ローマ人〔※ローマ人と先住民族が混血した人々を意味していると思われる〕のキリスト教徒たち。西ゴート人たちによる支配よりも711-12年のアラブ人・ベルベル人の侵入後のイスラームによる統治の方を好み、イスラームの慣習やアラビア語などを受け入れた³⁾。ここでは、モサラベたちは「イスパノ=ローマ人」とされ、アンダルスに住むイスラーム以前からの「人種 **race**」の一部であったことが含意されている。さらに、彼らが「イスラームの統治の方を好んだ」とされ、先行するイスラーム以前の権力構造ないし支配への不満が含意されている。つまり、彼らの不満が余りに大きかったので、彼らは自らの文化的慣習や言語を捨て、アラブ人のそれを選択したということになる。この説明では、それらすべてが、西ゴート人たちへの一種の抗議として為されたということになるのだろうか？この定義は明らかに、既に捨て去られた、もしくは少なくとも激しい議論があった、アル=アンダルスについての多くの先入観に基づいている。とはいえ、このような初期の学界による見解は、世間のモサ

ラベ共同体への理解に影響を及ぼし続けている。

『オックスフォード スペイン文学必携』における定義とは極めて対照的に、シモネットとカヒガスは共に、モサラベはアル=アンダルスにおいてイスラーム教徒の支配にはっきりと異議を唱えていたキリスト教徒たちだと論じている⁴⁾。2人にとっては、モサラベたちはイベリアへの（彼らがイメージする）イスラームの侵入に対しての、またカトリックの正統信仰の継続のための、真の抵抗を代表するものであった。その一方、モサラベたちはかなりの程度、西ゴート時代から現在までの文化の継続を示す存在でもあった。その継続のあり方は、シモネットやカヒガス、またレヴィ=プロヴァンサル⁵⁾の考えでは、『オックスフォード』が示す定義と真っ向から反してはいるのだが⁵⁾。

西ゴート由来のキリスト教徒たちやイスラームの支配に抵抗したキリスト教徒たちに加え、エパルサは一步進んで、ピレネーや地中海を越えてきた、他の——イベリア以外の——出自のキリスト教徒たちもいたとした⁶⁾。[彼によれば] これらの「新モサラベ」たちがアル=アンダルスに移住した理由は、一つには、同地域でのキリスト教徒たちに対する、イスラーム教徒の支配者の利益のため、よく知られた寛容のためであったとされる。このような寛容は、イスラーム帝国の他の部分では一般的ではなかったのである。彼らは奴隷であったかもしれないし、ある場合には、交易のためにアル=アンダルスに来たのかもしれない⁷⁾。ガリシアで9世紀に起きたように、またトレードで11世紀に起きたように、イスラームからキリスト教徒に転向してモサラベとなった者もいたかもしれない⁸⁾。

聖遺物や祭儀用の品にアラブの要素がある教会群などの美術や建築は、「モサラベ」様式と呼ばれる。例えば [有名な] ベアートゥス写本の彩飾もアラブ美術の要素を有している。また、「モサラベ」美術の産物の大部分は、アラブの装飾の要素を含む建築である。明らかなのは、モサラベの

ものとされる美術や建築が、主にキリスト教徒の領域に位置しているということである。つまり、「かつてアル=アンダルスだったところ」で作られているのであり、[※モサラベが住んでいたはずの]「アル=アンダルス内部」ではないのである。アル=アンダルスから北方の[キリスト教]諸王国へ逃れてきたキリスト教徒たちによって作られたと考えられてきたため、それらの作品はモサラベ様式と呼ばれてきた。しかし、実際には、それらがキリスト教徒たちによって作られたという決定的な証拠は、今日まで存在していない⁹⁾。

近代以降におけるこの言葉の使用で共通しているのは、いずれにしても、モサラベがイスラーム支配時代におけるキリスト教徒の生き方の類型と結び付けられるべきだとする考え方である。しかしながら、問題となっている「モサラベ」と同様に、キリスト教的信仰のタイプや起源も、時期や地域によって非常に多様であった。

2. 語源学から見た「モサラベ」

モサラベという言葉を変義する作業が複雑になっている理由の1つは、その語源的なルーツ自体が明らかでないことである。語源については、これまでに、2つの非常に異なる説が提示されている。言葉の文法的構造を根拠とする厳密にアラビア語を語源とする説と、その言葉が最初にラテン語の文書群で使用されているという事実および手稿文書における「モサラベ」の使われ方を反映した、ラテン語を語源とする説である。

「モサラベ」それ自体は、語源的にはアラビア語起源だと言えよう。このような語彙に対応するラテン語やゲルマン語の語根は存在していない。単語としての語彙項目「モサラベ」は、アラビア語の能動もしくは受動分子から派生したのであろう。動詞 *must'arib* の能動分詞形は非常に近

い、「アラブ人に似せようとしている人」を意味している。語源的には、この定義は、アラブ人に似せようとする意識的な行為を意味している。それゆえ、キリスト教徒だが自らの意思によってアラブ人のように振る舞い、話そうとする人々を意味する。誰も人々にアラブ人のようになれと強制してはならず、そうしている人たちはむしろ、自らの意思でそうしているのである。動詞 *must'arib* の受動形もまた、モサラベの語源的ルーツであり得る。この場合は、モサラベは「心ならずもアラブ化された人」または「他者からアラブ人であると思われるか、見なされている人」といった意味になるであろう¹⁰⁾。

他方で、「モサラベ」という単語が初出し、また使われるようになったのはカステイーリヤの領域（レオン）であり、北方のキリスト教徒たちとアラブ化されたキリスト教徒たちが、文化的な——時には宗教的な——差異を伴いつつ、初めて出会ったときであった¹¹⁾。とはいえ、この単語は明らかにアラビア語の語根を持っており、正面切ってこの用語を「カステイーリヤ語」とは言えない。そもそも、当時は「カステイーリヤ語」は存在していなかったのだし。

現代スペイン語では、モサラベは「第三者からアラブ人と見なされている人」を意味してはいない。むしろ、アラブ出自の人間の装いや慣習に合わせて振る舞い、それゆえにアラブ人のような人を指している。さらに言えば、*mustarib* は自動詞なので、受動形は存在したことはなかっただろう。我々が今日スペイン語で用いているこの単語が、そのような普通でない受動態に由来するとは考えにくい。その場合は、文法の蹂躪ないし非常に変わった発展を仮定しなければならないからである。また、その場合は、モサラベという用語がかつて、今日とは異なり、第三者による認識を意味していたことになるからである。

その言語構造的な起源を見極めることは、「モサラベ」が何を意味する

よう意図されていたのか——先述の、明らかに一定しないこの言葉の用法へ至る前の、最初の主要な意味は何だったのか——や、なぜ研究者たちがこの用語の一定しない使用を続けてきたのかという問題の解決にもつながる¹²⁾。カッシスが述べているように「明らかにアラビア語起源だと思われるけれども、「モサラベ」はカスティーリャ語である。アラビア語史料において、モサラベのルーツと思われる言葉は使用されていない¹³⁾。アラビア語史料には現れず、キリスト教徒の史料に現れるので、この言葉はカスティーリャ語の用語である。そして言語構造的にはアラビア語系の言葉である。この意味で、「モサラベ」はアル=アンダルスにおける二文化の完全な混淆物である。

今日では、モサラベ（という言葉）はキリスト教徒と結び付けられているが、語源的には、モサラベであるからといってキリスト教徒とは限らない。アラブではないのにアラブのようになった人間は、誰でもモサラベと呼ばれうるからである。ヒッチコックは、モサラベを「アル=アンダルスのアラブ化された人々」と定義し、特定の信仰には言及していない¹⁴⁾。アラブ人の辞書編集者アル=アズハリーは、モサラベをシンプルに「アラブ人でない人々」と定義している¹⁵⁾。アラビア語では「モサラベ」は必ずしも特定の宗教と結び付けられていないという事実にも関わらず、今日、その言葉はアラブのようなキリスト教徒であることと密接に結び付けられている。例えば、アル=アンダルスにおいて、ユダヤ人のモサラベという事例は存在していない。

3. モサラベについての歴史的記録——史料の問題

3-1. キリスト教徒の記録とアラビア語の記録

歴史史料において当該語彙（「モサラベ」）が現れる場所と、「モサラベ」

が示す特定の共同体の間には乖離がある。つまり、モサラベはアル=アンダルスのアラブ化されたキリスト教徒を指すようなのだが、その言葉（モサラベ）はアラビア語史料には一切現れないのである。アラブ人の支配者たちも、現地人のキリスト教徒たちを認識してはいただろうが、彼らについて特別な言及はしておらず、今日まで、これらの人々を「モサラベ」と呼ぶアラビア語史料は見つかっていない。それどころか、アラビア語の歴史史料では、土着の人びとに対しては「外国人」や「外国の人びと」を意味する *adjam* のような、極めて一般的な用語しか出てこないのである。アル=アンダルスでは、*adjam* や *adjamī* は、(ムスリムの支配下で暮らす)モサラベだけでなく、「アル=アンダルスの外に住むキリスト教徒たち」にも使われている¹⁶⁾。*adjam* や *adjamī* は、キリスト教徒一般を含むように意味が広がったのである。「ナザレ人 “Nazarene”」を意味する *naṣrānī* や、「多神論者」を意味する *musrik* なども見出せる。どちらもムスリムによるキリスト教徒への多神教徒としての認識を示唆するものである。他の言及すべき彼らの呼称としては、*dhimmī*, *mu'āhid*, *mushrik*, *rūmī* がある¹⁷⁾。ズインミー *dhimmī* はキリスト教徒とユダヤ教徒の双方を示すのに使われる。ユダヤ教徒共同体もキリスト教徒共同体も、「保護された人々」を指す *ahl adh-dhimma* の一部だからである¹⁸⁾。ルーム *Rūm* はビザンツ人としてのキリスト教徒を指すものであり、「軽蔑的な含意を一切持たない、人種的・政治的な用語」である。キリスト教徒を指す軽蔑的な表現には、*ʿilj* 「田舎者、粗野な者」や、*kāfir* 「不信心者」、*musrik* 「多神教徒」、*ʿabid al-aṣnam* 「偶像崇拜者」、*ʿaduww Allah* 「神の敵」、そしてキリスト教徒の支配者たち向けの *tāghiya* 「圧政者」がある。12世紀に北アフリカに追放されたキリスト教徒たちは、*farfān* として知られている¹⁹⁾。このように、アラビア語史料において「モサラベ」が現れないのと対照的に、ラテン語／ロマンス語の史料は、幾つかの異なる場で「モサラベ」を含ん

ている。最初のもはレオンの、キリスト紀元 1024 年の日付の文書である²⁰⁾。

土着のキリスト教徒たち全般への、また個別的にはモサラベたちへの、アラビア語史料の沈黙にも関わらず、キリスト教徒の史料は早くからこの集団に言及している。オルデリック・ウィタリス (1075-1142 年) のような早い時期の年代記作者たちや、年代記作者にして司教であるジャック・ド・ヴィトリ (1170-1240 年)、またトレード大司教ロドリゴ・ヒメネス=デ=ラダは、皆アル=アンダルスのキリスト教徒共同体に言及している²¹⁾。ヒメネス=デ=ラダこそは、彼らがアラブ人たちの間に混住しているが、アラブ人と同じとはみなされていないという事実から、Mistárabes または Mixti árabes という語源を推進した人物である²²⁾。

モサラベという言葉が、余りに多くの異なる事象に対して用いられているという事実も、話をよりややこしくしている。彼らは国家主義的な概念や、言葉または言語学のデータ、美術や建築、そして共通の宗教的アイデンティティ——この場合はキリスト教のそれ——によって結びつけられている共同体である²³⁾。例えば、伝統的にモサラベ文化の中心地であったトレードでは、この言葉は社会のある特権的なセクターについてのみ使用されている²⁴⁾。彼らは、他の宗教的・文化的な集団には適用されない、特別な権利を享受していたのである。[とはいえ]トレードでは 16 世紀までには、当該語彙はアラブ人の間で暮らすキリスト教徒のみを指すようになり、また、必ずしも特権の側面を伝えなくなっていた²⁵⁾。

3-2. モサラベの表出

誰がモサラベ共同体の成員かという同定が複雑であるのと同様に、モサラベ文書の同定も複雑である。そこには (1) アル=アンダルスの、キリスト教徒によって書かれたラテン語文書 (2) ハルジャス Kharjas やムワッ

シャフ Muwaššah [※9世紀末から10世紀初頭にアンダルスで創始されたアラビア語詩]におけるような、アル=アンダルスのキリスト教徒の手によってアラビア文字で書かれた、俗語的なロマンス語の文書、そして(3)アンダルスのアラビア語で書かれた文書ないし手稿文書で、アル=アンダルスのキリスト教徒住民に言及しているか、アル=アンダルスに住むキリスト教徒住民によって書かれたもの、が含まれる。最後のものは、キリスト教徒またはアラブ人によって書かれたトレードのモサラベについてのモサラベ文書群のようなケースである²⁶⁾。このトレードのモサラベ文書群の場合では、モサラベとは何かということに加えて、文書の作成者が誰かと言うことが問題となっている。極めて類似したウェスカ、トゥデーラやグラナダの文書群は、モサラベというよりムデハルや、時にはモリスコが作成者であると認識されている²⁷⁾。これらの事例から、「モサラベの」という名で呼ばれているこれらの文書群についても、出所や「※モサラベの文書だという」評価への再考が必要だと言えよう。極めて早期の研究から、これらの文書の収集は、地方のキリスト教徒共同体と密接に結び付いて行われてきた。特に、フランシスコ・ポンス=ボイゲスによる早期の研究は、これらの文書群の解釈のよりどころとなっており、フランシスコ=ハビエル・デ・シモネットの研究は、モサラベの歴史や存在を容易に思い出させることに貢献している²⁸⁾。

4. 「モサラベの中心地」の実情

4-1. バレンシア

近代スペインにおいて、モサラベと彼らのイメージは、国民的な——また幾つかの共同体においては地域的な——アイデンティティの構築における1つの中心的なテーマとなった²⁹⁾。このことは特にトレードとバレンシ

アに関してあてはまる。そこでは地域的なアイデンティティの構築において、モサラベとしての過去が中心的なテーマとなってきた。バレンシアのようなアル=アングルスの特定のエリアに住む人々の歴史を生み出すためにモサラベの概念を利用するこのアプローチは、研究者たちから厳しい批判を受けてきた。バルセロは、イベリア半島の他の地域で起こった全般的な歴史的傾向が必ずしもバレンシアのような特定の地域に適用できるわけではないため、この方法論には欠陥があるとしている³⁰⁾。

つまり、彼女はモサラベという言葉を用いて、バレンシアのキリスト教徒共同体に属するロマンス語と結び付けて用いることを非難している³¹⁾。そのようなアプローチは、言語は孤立して存在することがなく、また必ずしも特有の文化や共同体を意味しないという事実を否定しているからである。実のところ、バレンシアには在地のキリスト教徒と特に結びつけられるようなラテン語記述の証拠は無いのである。主張されてきたような、キリスト教徒とラテン語の間の密接な結びつきは無かった。書き手たちは在地のキリスト教徒ではなかったのかもしれない。つまり、書き手たちは違うエリアからやってきたか、ユダヤ人やムスリムだったのかもしれない。それゆえ、「ラテン語の使い手=モサラベだから、バレンシアのロマンス語で書かれた文書はモサラベのものだ」という考えは、間接的な証拠に基づくものであり、それらの間に直接的な結びつきは無い。実際、1167年と1240年の間で、モサラベのものと判断された文書は8点だけであり、ロケタの聖ピセンテの教会や修道院にある。これらの文書は、王による下賜や教皇の確認と関係しているものであり、ロマンス系言語の永続性やモサラベたちとは特に関係していない³²⁾。

アラビア語史料は、バレンシアのキリスト教徒たちについて、1094年と1101年の間の2回しか言及していない³³⁾。さらに、それらの文書は、モサラベとバレンシア固有のロマンス系言語とを必ずしも結びつけていな

い。このような事実にも関わらず、モサラベと純粋なバレンシアのアイデンティティの結びつきを宣伝し続ける研究者たちもいる。同じことは、モサラベの活動や政治、言語やアイデンティティについての歴史的中心地である、トレードの事例についても言える。

最後に、モサラベという用語は、『第一総合年代記』（1270年）において、ようやく明白に「キリスト教徒」という言葉の代わりに使われている。そこではそれらのキリスト教徒を、「ムーア人たち Moors」と共に育ち、彼らのように話し、彼らの習慣や礼儀を知っている者たちとしている。

4-2. レオン

現代の研究者たちが、711年のイスラーム勢力による征服のまさに初期から、モサラベに言及しているにも関わらず、レオンでは11世紀になるまで、この言葉について書かれた形態での記録はない。この語彙についての最初の記録は、バルデサルセの聖シプリアーノ修道院による、1024年の日付の法的訴えである。そこには“muzáraves”とされる原告三人が現れ、名前はビセンテ Vicente、アビアア Abiahia とヨハネス Iohanes である。彼らは国王の織工または繡匠とされている。「アル=アンダルスからの上級レベルの職人で、国王の命令で流行服や良い服を作るために」募集されてきていた³⁴⁾。絹や織物のような贅沢品は「その織物のゆえに……中で知られている」ので、アル=アンダルスからの重要な輸入品であった³⁵⁾。ビッチコックは述べている。

「これらの3人の織工 ticareros は、彼ら自身がある種の謎である。1人、アビアアはアラビア語名（アブー・ヤフヤー Ab (u) Yahya）を持っていて彼のアンダルス出自を示しているように思われる。他の

2人、ビセンテ *Vincente* とヨハネス *Iohannes* は、アラビア語化されていないようである。実のところ——彼らが少なくともキリスト教徒であることを示す——*muzáraves* という名称を除けば、彼らがアル＝アンダルスから北方へ避難するためにやってきたキリスト教徒であることを示すものは何もないのだ³⁶⁾」

“*muzáraves*”の1人がアラビア語名を持ち、他の2人がキリスト教徒名を持っているのは、特に驚くべきことではない。二つの出自のうちのいずれかの名前を持つことは、ごく普通である。しかしながら、注目すべきは、その文書において、*mozáraves* のうち2人はアラブ化されていないことが示され、最も重要なことに、「彼らが少なくともキリスト教徒である」ことを暗示するものが何も無いことである。このことは、今日我々がモサラベの意味として理解しているもの——モサラベという言葉が使用されるときは、「アラブ化されたキリスト教徒」を意味している——と直接的に矛盾しているように思われる。ヒッチコックは「彼らのうちの1人がアラビア語名を持っていたという事実は、彼らが集合的にモサラベ——つまり、アラブ化された人——として知られていたことを示すのに十分である」と主張する³⁷⁾。彼らの「アラブ化」を示す指標は他に何も無い。ヒッチコックはさらに以下のように述べている。

「(今日まで研究されたところでは) イベリア半島北部のキリスト教王国群の使用可能な史料全てにおいて、*muzárave* という言葉やその類似物が、共同体の成員を定義するのに使われている事例は他に無い。つまり、これら3人の人物の *muzáraves* という呼称は、完全に孤立した出来事なのである³⁸⁾」

彼らをモサラベという呼称のもとに類型化することを可能にしているのは集団的な特徴ではなく、彼らをモサラベとする何か他の特徴がなければならない。それゆえ、モサラベという言葉の使用は何か特別なことを意味していなければならない。この特定の集団は、アラブ化されていたにせよされていなかったにせよ、この訴訟に関わっていた他の人々や、同地域の他の共同体と異なっていたに違いない。チャルメタは、この文書における[モサラベという言葉]の使用は、モサラベにネガティブな印象を与えているが、しかし当該語彙には、なんらネガティブな意味合いはないように思われ、それよりも、むしろ事務的に用いられていると論じている³⁹⁾。研究者たちは、レオンにおけるモサラベの存在は、アル=アンダルスからの亡命の産物だと主張しがちである。しかしながら、1024年の文書では、*muzáraves* とされる3人の人物は、アル=アンダルスからの亡命者として現れてはいないし、彼らが亡命者であるという状況や彼らのアル=アンダルス出自への言及も無い。さらに、ピセンテヤヨハネスという名前からは、キリスト教徒またはユダヤ教徒である可能性もあるように思われる。命名の伝統と特定の宗教や出自と名前の結びつきをより詳細に分析すると、キリスト教徒の地には非常に多くのアラビア語に聞こえる名前を持つ人々がいることがわかる。例えば、レオンでは史料中に多くのアラビア名があり、幾つかの事例では、彼らがキリスト教徒であったとわかっている。それゆえ、キリスト教徒／ユダヤ教徒の名前=キリスト教徒／ユダヤ人、またはアラビア語の名前=イスラーム教徒という、密接な関係があるわけでもない。従って、この *muzárave* という言葉の最も早い事例は、特定の宗教とも、迫害されたもしくは亡命した集団とも、また実のところ、アラブ化された集団とも自動的に結びつくわけではない。

それでは、この文書のコンテキストにおいて、モサラベという言葉の使用は何を意味するのか？「...*muzáraves* という名称の提示は、彼らが保持

する威信を示しているのかもしれない…おそらく法廷の役人たちは…王への奉仕において、彼らを他者と区別する必要があったのだろう」⁴⁰⁾。このレオンの文書において3人の人物全てを結び付ける要素は、彼らが全て声望ある——アル=アンダルスのもので知られているスタイルの——織工であったという事実である。用語の最初の例において、モサラベは非常に明白かつ緊密に、アル=アンダルス——その織物技術が、非常に質が高く価値があると評価されている地——で修行したか、またはその技術がアル=アンダルスで発達したものである織工と結び付けられている。とりわけ、レオンにおけるモサラベという用語の出現は、アル=アンダルスからの大量の商品輸入の時期と一致している。オリバル・ペレスは、レオンへのアラビア系の語彙の流入の3つの主な時期を以下のように確認している。

「最も実りの多い、10-11世紀を通じた第二期において、アラビア語起源の借用語は、2つの異なる経路で入ってきた。1つは、この時代、アラブより産業的に遥かに遅れていたキリスト教スペインでは製造されていなかった、手工業製品の輸入を通じてである。もう1つは、南方出身の新しい移民、モサラベ達との接触の成果である。北方に定着し、在地の人びとの間に溶け込んだアラブ人やバルベル人が貢献した可能性も否定できないのだが…三番目の人びとは、アル=アンダルスや北アフリカの住民で、様々な理由でレオン王国に避難所を求めたのである⁴¹⁾」。

少なくとも文書におけるモサラベという語の最初期の使用については、それをアラブ化されたキリスト教徒という見解と即座に結びつけ、その他のあり得る定義——職業や特定の領域における専門化の度合いに関する情

報のような——を排除してしまうのは、軽率と言わざるを得ないだろう。

実のところ、これらの初期の事例を鑑みると、[モサラベという言葉と]宗教との密接な関連付けはより後代の産物であり、トレードで起きた可能性もある。

モサラベという言葉が現れる第2の文書もまたレオンのものであり、同じ世紀の日付が無い文書である。これら双方の手稿文書における「モサラベ」の使用について特に興味深いのは、それらが定義の必要なしに現れていることである。その言葉の意味が確立されており、当該文書の使用者は、その言葉に親しんでいたであろうということが示唆される。また、その言葉を使用するにあたり、如何なる躊躇いも見られない。

4-3. トレード

モサラベという言葉の使用は、「1085年のアルフォンソ6世によるトレード征服の後」により頻繁になった⁴²⁾。トレードのモサラベたちの法文書集として知られている文書集には、モサラベ (المستعرب) という言葉は計16回現れる⁴³⁾。これらの事例では、モサラベは特定の職業と密接に結びついているようには思われない。また、トレード地方またはトレード出身の人にも使われているので、この言葉がアンダルス出自の人々に限られているようにも思われない。モサラベという言葉は、1085年の再征服後のトレードでは家族名としても現れるし、続く時期には、都市文書に権利や特権と結びついて現れる⁴⁴⁾。

16世紀には、ほとんどの場合、モサラベは直接的にキリスト教徒であることと結び付けられた。アルフォンソ6世がモサラベたちに特権を与え、トレードのカテドラルの中にモサラベ典礼用の礼拝堂の建設を許可したからである⁴⁵⁾。しかしながら、16世紀までにはモサラベ教会群は荒廃し、一般的に、モサラベは貴族の一部とはみなされず、むしろ社会の中の

非特権的な部分となっていた。この時代において、トレードには3つの階層ないし類型のモサラベが存在し始める。(1) 西ゴートの子孫と呼ばれる人々。トレードにルーツを持つが、11世紀までには少数になっていた。(2) 南方のアル=アンダルスから北へ移住した人々 (3) やはりアラブ化のプロセスを歩み、トレードでモサラベとなった、カスティーリャやフランクなど北の諸王国出自のキリスト教徒たち。この最後の集団は、アンダルスのアラビア語を身に着け、またその成員は名前をアラビア文字で署名した⁴⁶⁾。

モレナは、12-13世紀の間、トレードにおいてモサラベとその他のキリスト教徒の間には差異があったと主張している⁴⁷⁾。特に、モサラベは公式に割り当てられた6つのモサラベ小教区に属するキリスト教徒と定められていた。それゆえ、モサラベであるためには、キリスト教徒であることや「アラブ化されている」だけでは十分ではない。同じく重要なのが、モサラベたちは、フエロ・フスゴ *Fuero Juzgo* と呼ばれる1101年の取り決めのもとで、一定の権利や特権を「保持する」ことが認められている人であるということである。

最後の基準は、共同体の言語的慣習と関係している。モサラベは、公証人の前で契約書に署名できるほどに、「モサラベの言葉」を十分に操ることが出来る人、とも定義されうる⁴⁸⁾。それゆえ、ある程度まで、最低限のレベルのリテラシー、文書に署名する能力を持つことは、モサラベと見なされるための決定的なファクターであった。これら全てのファクターを結び付けると、モサラベというのは、トレードの社会の特権的な成員であり、固有の小教区群に属し、それなりの教育を受けていた人々だとみなされる。

特に興味深いのは、定義上は[当然]、モサラベは契約書を理解し、署名することが出来なければならないということである。トレードのモサラ

べたちの契約書群は、アンダルスのアラビア語で書かれている。モサラベたちがアル=アンダルス中で維持していたと想定されている言語である、ロマンス語では書かれていない⁴⁹⁾。さらに、複数の証拠が、トレードのモサラベは話し言葉でも書き言葉でもアラビア語を使用していたことを示している。このことは、モサラベの共同体がアンダルスのアラビア語を評価し、他の選択しうる記述言語よりも筆記においてそれを選択するほどに、十分に社会的に重要とみなしていたことを、強く示している⁵⁰⁾。さらにモレナは、適切にも、トレードで誰もがアラビア語を完全に理解していた時に、トレードのモサラベ共同体が2つの言語——書き言葉と話し言葉で使われる言語（アラビア語）と話し言葉でのみ使われる言語（ロマンス語）——を必要としていたのかは不確かだと指摘している⁵¹⁾。それゆえ、直接的な証拠が無いにも関わらず、「モサラベたちはアンダルス時代を通じてアンダルスのアラビア語と同じくロマンス語を積極的に維持していた」とする想定には、さらなる検証が必要であろう。モサラベたちにとって価値ある文化は、明らかにアラブ系のそれでロマンス語のそれではないのに、1つの文化言語〔※ロマンス語〕を維持するどのような目的がありえたのだろうか？モレナは、トレードにおける言語の口語での、また方言としての使用が文書に反映されているという仮説を立てている。羊皮紙群は、アラビア語のスタンダードな用法ではない、いくつかの口語の言葉や、またロマンス語系の単語を含んでいる。だから、これらの文書群における書き言葉が共同体の口語慣行の正確な鏡だとまでは断言できないが、それらの良き指標にはなると思われる。

含まれている話し言葉の痕跡以外にも、モサラベの共同体がアンダルスのアラビア語を理解し、使用していたことを示す良い指標がある。複数の文書において、文書がひとたび作成されると、関係者たちに向けて読みあげられたことが述べられているのである。このことは、使用されている

「言語」が読まれ、続いて文言に合意がなされたことを示している。さらに、アラビア語の重要性と、それが社会的指標となっていたという事実は、ある公証人のアラビア語に対して、ロマンス語の単語が混じっていたり、また書き言葉が方言的だったりするという理由で「凡庸なレベル」だという批判が為されていることで確かなものとなる。トレードは1085年に再征服されたが、アラビア語は、13世紀末か14世紀初め頃まで法的文書から消失しなかった。1391年まで、アラビア語はアラブ人の共同体において、またモサラベやユダヤ人の共同体において、文書作成の際の主要言語として使用され続けたのである⁵²⁾。最後に、アラビア語の使用は、アルフォンソ10世の治世においてカスティーリヤ語が書き言葉と定められるまで、減ることはなかった⁵³⁾。

5. 学界の伝統における「モサラベ」の用法

「モサラベ」や「モサラベ的」に確固たる定義が無いという事実は、研究者の間に混乱を引き起こすだけではない。同じ著作の各部分で矛盾した概念が示され、この領域の専門家たちがこの用語を使用するときの不確かさを露呈することにもつながる。例えば、コルベールはコルドバの殉教運動について語る際に、モサラベはイスラーム帝国の外部に暮らすキリスト教徒たちだと断言しているが、にも関わらず同じ著作の中で、彼らはアル=アンダルスの領域内に暮らすキリスト教徒だとも述べている⁵⁴⁾。さらに、「モサラベ」は——[※コルドバの殉教運動に参加した] 聖エウロギウスやアルウァルスのような——反アラブ文化主義者を指すときにも、また——10世紀の司教ラビーブ・サイド Rabib Zayd のような——明らかにアラブ化された社会の成員を指すときにも使われる⁵⁵⁾。「モサラベ」がアラブの影響に抵抗する人を指し、また他の事例では——カトリックの司教

でありながら明らかにアラブ名を名乗っているような——完全にアラブ化している人を指すということが、どうして可能なのだろうか？

学界のどの事例においても、どのように「モサラベ」と、彼らのアル=アンダルスおよびイベリア半島全体への貢献の程度や範囲が定義されるかは、聴衆が一般の人か研究者か、また当該研究者の関心が特にモサラベのどの側面に向けられているかによって、多様である。研究者の間で周期的に起こる、1つの類型の史料——土地分配記録や公証人文書、または年代記のような——にのみ集中するという傾向が、モサラベ語を話す共同体についての不正確なイメージを永続させることにつながっている。また、分析を行う際にはデータの限られた範囲を考慮に入れないと、誤った一般化へ導かれることになる。モサラベについての〔近代的歴史〕研究としての関心は、1888年のフランシスコ・ポンス=ボイゲスによるトレードの大同司教座にあるモサラベ文書群に関する最初の議論によって19世紀に示された⁵⁶⁾。ボイゲスにとってこのコレクションは「先行する4世紀の間、イスラームの信奉者たちに囲まれていたとは言え、ラテン=西ゴート人種の聖遺物」であった⁵⁷⁾。彼にとって、モサラベたちは、イスラームに直面し、囲まれた際にも、信仰や、彼が言うところの「ラテン=西ゴート人種」を無傷で守った英雄的な集団であった。それらの文書がアンダルスのアラビア語で書かれているという事実も、文書の中に高いレベルのロマンス語やロマンス語の永続性が反映されていると解釈するボイゲスにとっては、明らかな矛盾ではなかった。彼は「そこに使われているアラビア語は、キリストの弟子たちやその教会に対する非難の手段ではなく、キリスト教の三位一体の聖なる神秘を愚弄し、軽蔑する物でもなかった」と論じている⁵⁸⁾。

これらの「キリスト教徒」たちが、明白かつ持続的にアンダルスのアラビア語を選択して用いていたにも関わらず、ボイゲスはそれが、彼らが実

際にはキリストとその教会の弟子たちで在り続けた証拠だと主張し、モサラベをキリスト教会と結び付けている。彼は、アラビア語の使用は最も純粋なカトリックの正統信仰を表すものであり、モサラベが実際にアラブの慣習を身に着けつつあったことを示すわけではないとして、アラビア語を自身の主張の支柱としている。彼にとって、アラビア語の使用は、隠れカトリック信仰の（お粗末な）確証なのである。ボイゲスは次のように説明する。

「そこではアラビア語が最も純粋なカトリックの正統信仰の雄弁な表明なのである。アラビア語において、「父と子と聖霊が1つの神である」という、明白で厳粛な信仰告白が示されている。聖母マリアと聖人たちへ加護が希求され、完全なるカトリックの教義が「使徒たちが告げ、教父たちが述べたように」表明されている。それゆえ、ここで使われている言語は、極めて深く根付いた信仰と極めて純粋なキリスト教徒としての感情の真の反映なのであり、ムスリムの書き手が使うのとは非常に異なる、特別なアラビア語であるということが出来る。それは、言ってみれば、キリスト教化され、スペイン化されたアラビア語なのである⁵⁹⁾」

ここで再び、我々は理念の氾濫を見出す。第一に、ボイゲスにとって、アラビア語の使用は決してモサラベたちがアラブ化されていた証拠ではなく、実際には、彼らのカトリックの正統信仰の表明ないし反映であった。これは、ボイゲスが実のところ明らかに無視している、明白なパラドックスである。第二に、彼はこのタイプのアラビア語は「キリスト教化」また「スペイン化」されたものだと主張しているが、なぜ、どのようにこのタイプのアラビア語がそういった性格を有しているのかという、具体的な事

例や議論は示していない。問題となっている文書群は、土地の売買や相続、また贈与といった厳密に法的な事柄を扱っており、それらが何らかの特定の宗教を表明しているとは考えがたい。1つの統一されたスペインという概念は、このコレクションが作られたときには形成されていなかったのだから、そのアラビア語が「スペイン語化されていた」という見解には、一層の説明が必要であろう。さらに、イベリア半島に「ラテン=西ゴート人種」が存在していたという考えは、近代の産物であり、まさにその文書群においてモサラベという人種についての議論が無いことを鑑みると、時代錯誤というべきである。ボイゲスにとって、モサラベは、文化・言語・慣習においてイスラームの影響に抵抗した、同質的な集団であった。彼らが700年に渡って完全な隔離を維持することが出来たというその主張は、その後論駁され、切り捨てられてきている。通婚や広い意味での「混雑」が存在したのは明らかだからである。最後に、当該文書群における証拠は、モサラベたちが積極的にラテン=西ゴート人種を維持しようとしていたという議論を支持するものではない。歴史を組み立てるには、きちんと文書の中に証拠を求めねばならず、史料に提示して欲しいと求めていることを外挿法に拠って推定してはならない。

ボイゲスの著作は、現在ではモサラベの問題についてのプリミティブな研究としか見なされていない。しかし、早期の研究における彼の主張は、未だに一般の間で事実として流布されるほどに人気があり、広く流布していた。より問題なのは、一般の間だけではなく、現代の学界においてもボイゲス自身の研究が基礎的文献となっていることであり、永続的にモサラベをカトリック信仰によって規定された初期の国民主義的な集団とせしめている。またその見解は、学識者の情報源から来ていることもあって、根強いものとなっている⁶⁰。

ハビエル・シモネットは、おそらく最も重要で影響力のある、初期のモ

サラベ研究者である。彼の研究は、モサラベについて知り、理解する上で必須である。ボイゲスがしたように、シモネットもトレードのモサラベ文書を分析し、以下の2冊を著した。*Historia de los Mozárabes de España* 『スペインのモサラベの歴史』(1867)と *Glosario de voces ibéricas y Latinas usadas entre los mozárabes* (1888) 『モサラベの間で使われたイベリア系・ラテン系単語の用語集』である⁶¹⁾。この文書群の豊かな情報にも関わらず、どちらの本も史料解釈における彼の先入観を示している。例えば、『用語集』では、モサラベのものとされる単語の出所がしばしば明示されていない。それらの単語の多くは、トレードの大司教座聖堂の手稿文書のコレクションには見いだせないのだが。ラテン語系の単語の解釈に際しては、複数の解釈がありうる場合でも、シモネットは一貫して古いカステイリャ語に最も近い選択肢を選んでいく。さらに、シモネットは『イベリア系・ラテン系単語』の選別をしており、それぞれの語彙項目について全てのオプションを書いておらず、文法についての完全な議論も欠けている⁶²⁾。

明らかに、フランシスコ・ポンス=ボイゲスも、またフランシスコ=ハビエル・デ・シモネットも、彼らが「キリスト教徒的」であると解釈するもの、またはイスラーム以前からの伝統の存続を示すと見なしうる証拠に焦点を当てている。彼らの重要な研究におけるこの傾向は、初期の学界に、モサラベはアラブ化に抵抗していたキリスト教徒である、という見解を創り出した。彼らの解釈のもととなった手稿文書群は、スペインのアラビア語で書かれ、その共同体が実際には言語と慣習においてアラブ化されていたことを明らかに示しているにも関わらず。

ボイゲスとシモネットに続く、モサラベについての最も重要な研究者は、おそらくガルメス・デ・フエンテスである⁶³⁾。彼は、モサラベの多様性や、モサラベの共同体を理解し、解釈するために使用できる史料につい

てより包括的な見解を示してはいるが、2 類型の文書群にのみ注目する傾向がある。用語集と分配記録 *Libros de Repartimiento* である。

初期の研究者たちの方法論は、単純に同じ共同体の異なる側面に光を当てたものだと主張する研究者もいる。しかし、対象となっている共同体が、時間や空間、そして最も重要なことだがその性格において、時としてラディカルに異なっていると思われる。アイデンティティの構築は多くの側面によって為されるとはいえ、モサラベのケースでは、それらが矛盾していて、1つの全体像に向けて補完しあっていない。

6. モサラベと言語変容についての議論

6-1. ロマンズ語

レオンにおいて、モサラベが言語に与えたインパクトは、住民全体にこの特別な共同体、モサラベたちが与えたインパクトの見地から分析すべきであろう。レオンでは初期の直接的な証拠は3人のモサラベのそれしかないが、1024年の文書はより大きい一般的な現象を反映していると考えべき事例ではないだろうか？この訴えにおけるモサラベ *mozáraves* への早期の言及は、当該時期におけるレオンへのモサラベの織工の流入のしるしなのだろうか？モサラベ人口の増大は、レオンにおけるリング・フランカ（共通語）形成に寄与するファクターとなるほどの規模だったのだろうか？さらに言えば、モサラベだけがレオンの言語にアラビア語の語彙をもたらしたのであるだろうか。アラビア語語彙をもたらした、他のアイデンティティを持つ人々もいたのだろうか？

イベリアでのアラブ人とキリスト教徒たち間の通商や協定について我々が持つ情報から考えて、レオンにおいて、モサラベだけがアラビア語語彙をもたらしたわけではないように思われる。年代記群から「特に、キ

リスト教の君主たちによって近年併合された領域を占有するために、アル=アンダルスを含むイベリア半島の他の諸地域からの移民があった」ということがわかっている。時折、移民の波があったようであり、また「880年代からアブド・アッラフマーン3世の治世（912-961年）を通じ、かなりの移民があった。950年代の後も、史料にはまだ（相当な量の）、全てを移民に帰すことが出来るわけではない、アラブ名が現れる…都市の住民や農村の住民、アラブ化の度合いも様々な、異なったセクターからの人びとが、様々な理由で北方に向かったのである⁶⁴⁾」

とりわけ、修道院で多くのアラブ名が見出される。キリスト教の修道院は、あるいは良い安全な避難所で、アル=アンダルスからくる人々に特にアピールするような利点を提供したのかもしれない。ヒッチコックは次のように説明している。

「もし個別の修道院において、自署による証拠として利用可能な史料を探るのであれば、このアラブ化について何らかの説明を提供できるであろう…これらの文書は多くのアラビア語の単語を含んでおり、それらはイベリア半島北部へのいわゆる「モサラベの浸透」の証として用いられてきた…10世紀を通じ、特にアブド・アッラフマーンがアル=アンダルスで絶対的な権力を確立した後、940年代から彼の後継者のアル=ハカム2世の治世（961-972年）の間まで、950年代と960年代をピークに、過剰なほどの明らかなアラブ名が見出されるのは、否定できない事実である⁶⁵⁾」

それゆえ、アル=アンダルスからレオンにきた、アラビア語を話し、教会群やその付属領域の中に共同体を確立していた、かなりの数の人びとが居たことがわかる。これらの事実を踏まえると、文書中のアラビア語起源

の単語群は、実はアラブ出自の人びとによるもので、「通訳者」として行動していたモサラベたちのような、第三者の集団によるものではないだろう。とはいえ、その小教区においては、人口全体におけるよりもアラブ人の密度が高かったかもしれず、文書群も全体として一般に使われているよりも高いアラビア語の単語の比率を示しているかもしれないということも、指摘しておきたい。

オリベル・ペレスによると、レオンのアラビア語の用語群について最初に論じたのは、マヌエル・ゴメス=モレノで、1919年にマドリッドで出版された *Iglesias mozárabes. Arte español de los siglos IX a XI* 『モサラベ教会。9-11世紀のスペイン美術』においてである。この著作で、ゴメス=モレノは教会群におけるアラビア語の用語群を、モサラベと関連付けている。彼は、アラブ人が直接レオンの言語に「アラブ的語彙」を与えたとは考えていないのである。そしてそのため、続く研究者たちにとって問題を難しくしている。レオンにおけるアラビア語の用語群を理解する上で重要なもう1つの著作が、「13世紀のアラビア語の語彙リスト」である。コリエンテは次のように強調している。

「ラモン・マルティの著作とされている本には…2人の異なる人格が介在している。「かなりのイスラーム文化」を持つ人物と「かなりの中世の教会的・ラテン的文化」を持つ人物が、ラテン語=アラビア語用語集の責任者であったろう。他の可能性として、「ラテン語もアラビア語も知らない」「より能力の低い、書き言葉というより口語的な」モサラベ聖職者がラテン語=アラビア語語彙集の作成者かもしれない⁶⁶⁾」

また、アラビア語起源の単語ないしアラブ的単語が、モサラベと強く結

び付けられている。最も興味深い情報は、1024年の文書に寄与した人物の一人が、ラテン語にもアラビア語にも詳しくなかったという点である。彼は低いレベルで言語を使用しており、つまり聞き言葉や話し言葉に限られていて、「視覚的な」使用を行ったり、書き言葉を解釈する能力がなかった。限られた教育しか受けておらず、それゆえ「聞いた」ことを書き、またきつとそうであろうと彼が考えたことをもとに、綴りを書いていた。この特定の事例は、話し言葉についての良い情報源でもある。さらに、このことはレオンのロマンス語を、周辺から孤立して作られ、発展した、透過性のない明確な統合体として扱うべきではないという証拠である。レオンはアル=アンダルスとの商業や交易の重要な中心地であり、1つにはレオンの透過性の高い境界のため、また話し手たちが自らの言語を維持しようとして戦う場所であったため、言語は複雑な言語的構築物として発展したのである。

それゆえレオンは、ペニーが「方言の連続体」と呼ぶ事例であり、内部に方言の境界を持たない広い領域であった⁶⁷⁾。話し手たちにとって、1つの方言ないし言語を他と区別するのは困難であり、多様な言語ないし方言が、相互の連続体と見なされていた。問題となっている諸言語は、話し手たちには2つの違う言語ではなく、同じ言語体系の異なる部分であると解釈されていた。ペニーは、この方言的な推移は例外的ではなく、むしろノーマルだと主張している。「国境」を越える頻繁な移民が生じている境界領域では、より集権化された領域に比べ、多様な社会的出自の人びとのより大きな混淆が存在する。つまり、社会にも言語にもより流動性があり、言語の硬化ないし確定は少ないのである。移民の動きの結果は、1つの言語ないし方言が他の場所へ移住することではなく、むしろ当該地域で話されている全ての言語の混淆 *koneization* なのである。この境界領域、レオンでは、複雑なスキーム——すなわち、モサラベたちを通じた言語の

移行——を持ちだす必要は無い。アラビア語の単語が頻繁に現れることは自然な言語学的プロセスで説明できるのだから。

9世紀から12世紀にかけてのレオンについて、社会的、政治的、また言語的に表面的な分析を行うだけでも、モサラベたちが初期のロマンス語に対するアラブの文化や言語の、文化的・言語的な懸け橋または通訳として行動した集団だったとする議論は難しくなるだろう。オリベル・ペレスの議論を考慮して欲しい。

「最後に、モサラベの貢献という論争の多いテーマに焦点を置くと、私の見解では、この社会集団がイベリア半島北西部の言語に「アラブ的語彙」の流入をもたらしたとする何度も繰り返されてきたテーゼには、再検討が必要である。特に、レオンの文書におけるアラビア語からの借用語に言及する際に、「モサラベの影響」という言葉を使うのは避けねばならない…もちろん、それは歴史的現実に対応していない…我々は、勝者たちと敗者たちの並存の結果としての「アラブ的語彙」の存在を主張しなければならない⁶⁸⁾」

モサラベという言葉が文書に現れるまでには、レオンは既にキリスト教徒の支配下に置かれ、アストゥリアスの君主の下で、南北からやってきたキリスト教徒たちにより、「レコンキスタ」の思想の下で再植民されつつあった⁶⁹⁾。

6-2. 俗語、アンダルス=ロマンス語、そしてモサラベのロマンス語

ガルメス・デ・フエンテスによれば、モサラベたちはアンダルス時代を通じて、家庭や非公式な環境では、アルカイックなロマンス語を用いながら意思疎通をし続けていた⁷⁰⁾。先述のハルジャスやムワッシャフといった詩

歌で使われていた言語が、アンダルス時代を通じたロマンス語の維持を反映しているとはいえ、これらの事例が一般的なモサラベの共通語であったと想定することは出来ない。それらが社会的・言語学的な理由よりも芸術的な見解を踏まえた、芸術的な産物であるというのは極めて正しい。中世の文字記録に見出される言語が、話し言葉を正確に反映していると思えるかという問題は、長い間議論されてきたが、常に解決が難しい問題であった。無論、文字記録は話し言葉の指標ではありえるし、ロマンス語はモサラベの言語的レパートリーの一面ではあったかもしれない。しかし、それは決して、ロマンス語が第一に用いられた言語であることを意味しない。トレードのモサラベ文書群を含む証拠は、アル=アンダルスにおいてレコンキスタの後でもロマンス語の使用はむしろ限定的であったこと、またトレードの一般的な日常言語は、アラビア語ベースのものであったことを示している。

現在まで、比類ない偉大な冒険的叙事詩である「ローランの歌」のような、いかなる見本となるモサラベ語のテキストも見つかっておらず、また彼らはアラビア語でのキリスト教文学も創り出してはいない（少なくとも伝来していない⁷¹⁾。

研究者たちにハルジャスやムワッシャフのような短い作品の言語的痕跡に集中させるよりも、俗謡や民話を含むモサラベの文学的伝統が、モサラベの言語体系はどのように構築されていたか、またそれは社会でどのように機能していたかについて、研究者たちに指標を提供するであろう。これらの（ハルジャスやムワッシャフのような）作品は、アル=アンダルスにおいてロマンス語の使用が維持されていたと論じる努力の中で言及される。しかしながら、トレードの大司教座聖堂の文書群において示されるように、日常生活の中で相互に使用されるのは、ほとんどアンダルスのアラビア語であったと思われる。他方で、ハルジャスやムワッシャフの文

書は限られた史料であり、トレードの大司教座聖堂の文書群は、大規模なものであるとはいえ、法的文書であるという性質のため、かなり定式的で、言語学的には限られたものである。アンダルのロマンス語であるモサラベ語は、広く行き渡っていたので、この現実を反映したより大きな文字記録の発見が期待できるであろう。

また、モサラベの共同体はどのようにして、アル=アンダルスとキリスト教諸王国の双方で、言語の使用や発展に影響を与えたのだろうか？例えばレオンでは、当該の織工たちが、レオンのロマンス語へのアラビア語系単語流入の責任者だと言えるのだろうか？ある言語集団が居住する地域の言語にそれとわかるほどの影響を与えるには、共同体に技術その他の見地から貢献し、社会的重要性を得る必要がある。人口の見地からは、最初は相当であったものの、モサラベ共同体は減りも増えもしなかった。1311年に、アラゴンのクレメンスは、グラナダには20万人の人口があると記している。実のところ、そのほとんどは半島のキリスト教徒の子孫である⁷²⁾。ラシェル・アリエによれば、イシドロ・デ・ラス・カヒーガスは1947年に、モサラベの共同体は、特にグラナダにおいて、13世紀半ばには存在しなくなったと主張している⁷³⁾。

アメリカのトマス・グリックやフランスのアデリーヌ・リュコワは、モサラベの人口は13世紀までに極めて少なくなったが、痕跡はまだ見いだせると述べている。実際、人口の20パーセントはまだ非イスラーム教徒であったと見積もられる⁷⁴⁾。アリエは、1232年以降のグラナダでは、キリスト教徒の共同体は、ある程度、戦場または敵地——アル=アンダルスとキリスト教徒に征服された土地の間の境界は流動的であった——への遠征から連れ帰られた捕虜によって維持されたと主張している。捕虜の中には、農夫や庭師、土工や労働者が居た。ある時期には、グラナダだけで7000人のキリスト教徒の捕虜が居たと見積もられるが、彼らは、カトリ

ック両王によるグラナダの包囲と攻略の際には、1500人しか生き残らなかった⁷⁵⁾。この証拠だけに依拠すると、モサラベたちが言語面で相当なインパクトを与えるに十分な人口を継続的に持っていたとか、共同体全体に社会的影響を与えるほどの社会的な声望を享受していたとか、論じerことは難しい。ほとんどの場合、1つの集団が全共同体の言語に一手に影響を与えるような威信を享受することは無く、むしろ異なる言語共同体群が、異なる言語の合同を反映しつつ、共にリング・フランカ、コイナー（共通語）を形成していく。アル=アンダルスで起こったのもそれだと思われる。

7. 結論

モサラベという言葉は、研究者たちの中で無節操かつ不正確に用いられてきており、そのため、時に過度な一般化や不正確な憶測と結びついている。さらに、研究者たちは特定の種類の史料にのみ焦点を合わせ、時には史料が導いてくれる道よりも、明らかに自分の先入観に基づいて決定を下す傾向があった。概して、初期の研究者たちは、初期の年代記作者たちと同様に、モサラベを「イスラーム教徒から分離しているキリスト教徒」という理想や、またアル=アンダルスにロマンス語が持続的に普及していたという見解と結び付けた。結果として、モサラベはイスパノ-西ゴートの過去、つまり西ゴートのスペインやイスラーム教徒による影響への抵抗といった、国家主義的な理念と結び付けられた。モサラベは、一方では継続的な西ゴートの過去ないしカトリック的-スペイン的なアイデンティティと結びつき、他方では我々の、史料が示す証拠を客観的に考察する能力を、継続的に低いものとするネガティブな傾向と結びついたのである。モサラベという名のもとに多くのタイプのキリスト教徒たちが存在していたというエパルサの主張は、西ゴート時代から現代までの継続性を想定する

[上記のような] 考え方を打ち砕くものである。

モサラベの言語ないし方言を同定し、説明する際には、口語をもっともよく示すものとして、どのタイプの文書を分析すべきかを考えねばならない。ここでは、アイデンティティの発露、言語使用に関する理論、そして我々が知るところのモサラベの歴史が関わってくる。[そこには] 3つの主な〔伝統的な〕見方が存在している。(1) モサラベは真のカトリックの正統信仰を維持していたイスパノ-西ゴート人種である(2) モサラベの言葉は、主として、アラビア文字で書かれたロマンス語の一種である(3) モサラベは家庭においてロマンス語を維持していたイベリアのキリスト教徒たちである、という3つである。近年の研究者たちは、モサラベの事例について、より批判的で新鮮な眼差しを持ち始めているが、依然として[これらの見方のような] 初期のモサラベ研究に足を引っ張られ、毒されている。

最も注意すべきは、モサラベたちを彼らのものとされてきた芸術作品や文書と結び付ける証拠が、実際にはほとんどないことである。それゆえ、我々が研究を続け、古い見解を批判する上で、何がモサラベ的で何がそうでないかを定めることは、1つの中心的なテーマとなるであろう。近年の研究、例えばシリル・エレとマイテ・ベネーラス、フィリップ・ロウスが編者となった2008年の本、ヒッチコックの2008年の本、またマヌエラ・マリンが編者となった2009年の『アル=アンダルスとスペイン。対比的ヒストリオグラフィ、17-21世紀』は、いずれもモサラベの問題について、新しく新鮮なアプローチの諸事例を示してくれる⁷⁶⁾。これらの研究はいずれも研究者たちを新たな視点で手稿文書群に向かわせるよう努めており、その際、モサラベについて「史料が何を語るべきか」という先入観に向かわせないよう、それよりむしろ、分析を「史料が語っていること」に限定するように気を付けている。さらに、アル=アンダルスが複合文化的な社

会であったという事実をより一層考慮に入れることで、研究を前進させ、中世イベリア史におけるモサラベの定義と役割をより明確にすることが可能となるかもしれない。

註

- 1) Real Academia Española, *Diccionario de la lengua Española*, Madrid: Espasa Calpe, 2001, pp.1410-1411; Simonet, Francisco Javier. *Historia de los mozárabes de España*, Madrid: Turner, 1867; Ward, Philip, ed., *The Oxford Companion to Spanish Literature*, Oxford: Clarendon Press, 1978.
- 2) Epalza, Mikel de. “Les mozarabes, état de la question”, *Minorités religieuses dans l’Espagne médiévale*, Manuela Marín, Joseph Manuel Martin, eds., Aix-en-Provence: Édisud, 1992, p.41.
- 3) Ward, Philip, ed. *The Oxford . . .*
- 4) Cagigas, Isidoro de las. *Minorías étnico-religiosas de la Edad Media española. Los Mozárabes*, Madrid: Instituto de Estudios Africanos-Consejo Superior de Investigaciones Científicas, 1947; Simonet, Francisco Javier. *Historia de los mozárabes de España*. Madrid: Turner, 1889.
- 5) Lévi-Provençal, Évariste. *L’Espagne musulmane au X^e siècle. Institutions et vie sociale*, Paris: Larose, 1932.
- 6) Epalza, Mikel de. “Les mozarabes. . .”, p.41; Epalza, Mikel de. “Mozarabs: An Emblematic Christian Minority in Islamic Al-Andalus”, *The Formation of Al-Andalus*, Manuela Marín, ed. Aldershot-Brookfield-Singapore-Sidney: Ashgate, 1998, p.39.
- 7) Epalza, Mikel de; Llobregat, Enrique. “¿Hubo mozárabes en tierras valencianas? Proceso de islamización del Levante de la Península (Sharq Al-Andalus)”, *Revista del Instituto de Estudios Alicantinos*, 36 (1982), pp.7-31; Arié, Rachel. “Les minorités religieuses dans le royaume de Grenade (1232-1492)”, *Minorités religieuses dans l’Espagne médiévale*, Manuela Marín, Joseph Manuel Martin, eds. Aix-en-Provence: Édisud, 1992, p.53.
- 8) Teres, Elias. “Linajes”, *Al-Andalus*, 27 (1952), p.83; Simonet, Francisco Javier. *Historia de los mozárabes. . .*, p. 217.
- 9) Barceló, Carmen. “Mozárabes de Valencia y ‘Lengua mozárabe’”, *Revista de filología española*, 77 (1997), p.257.
- 10) Kassis, Hannah. “Arabic speaking Christians in Al-Andalus in an age of turmoil (Fifth/Eleventh Century until A. H. 478/A. D. 1085)”, *Al-Qantara*, 15 (1994),

- p.401, note 1; Aguilar, Victoria. "Onomástica de origen árabe en el reino de León". *Al-Qantara*, 15 (1994), p.352.
- 11) Chalmeta, Pedro. *Invasión e Islamización, la sumisión de Hispania y la formación de al-Andalus*, Madrid: Mapfre, 1994; Chalmeta, Pedro. "Mozarabes", *Encyclopedia of Islam*, Leiden-New York: Brill, 1993, VII, p.247.
 - 12) Hitchcock, Richard. "¿Quiénes fueron los verdaderos mozárabes? Una contribución a la historia del mozarabismo", *Nueva revista de filología hispánica*, 30/2 (1981), p.576.
 - 13) Kassis, Hannah. "Arabic speaking Christians in Al-Andalus. . .", p.401.
 - 14) Hitchcock, Richard. "¿Quiénes fueron los verdaderos mozárabes?. . .", p.585.
 - 15) Kassis, Hannah. "Arabic speaking Christians in Al-Andalus . . .", pp.401-402.
 - 16) Kassis, Hannah. "Arabic speaking Christians in Al-Andalus . . .", p.40, note 15; Barceló, Carmen. "Mozárabes de Valencia . . .", p.254.
 - 17) Chalmeta, Pedro. "Mozarabes". . . : VII, pp.246-249.
 - 18) Hitchcock, Richard. *Mozarabs in Medieval and Early Modern Spain: Identities and Influences*. Cornwall: Ashgate, 2008, p.xii.
 - 19) Barceló, Carme. "Mozárabes de Valencia . . ." p.254.
 - 20) *Colección documental del archivo de la catedral de León*, ed. José Manuel Ruiz Asencio. León: Catedral de León, 1999, III, pp.399-400; Hitchcock, Richard. "¿Quiénes fueron los verdaderos mozárabes?. . .", p.579; García Villada, Zacarías. *Catálogo de los codexs y documentos de la Catedral de León*. Madrid: Clásica española, 1914, p.128.
 - 21) De Vitry, Jacques. *Histoire orientale*, Turnhout: Brepols, 2008; Hinnebusch, Jacques; Hinnebusch, John Frederick. *The Historia Occidentalis of Jacques de Vitry*. Fribourg, 1972; Ximénez de Rada, Rodrigo. *Historia de rebus Hispanie sive Historia Ghotica*, Turnhout: Brepols, 1982; Orderic Vital. *Historia ecclesiastica*, Oxford: Clarendon Press, 1978; Aillet, Cyrille. "La question 'mozarabe'. Bilan historiographique et nouvelles approches", *Al-Andalus/España. Historiografías en contraste. Siglos XVII-XXI*, Manuela Marín, ed. Madrid: Casa de Velázquez, 2009 pp.296-297.
 - 22) Olstein, Diego Adrián. *La era mozárabe: Los mozárabes de Toledo (siglos XII y XIII) en la historiografía, las fuentes y la historia*. Salamanca: Universidad de Salamanca, 2006, pp.23-36.
 - 23) Peñarroja Torrejón, Leopoldo. *El mozárabe de Valencia*. Madrid: Gredos, 1990; Galmés de Fuentes, Álvaro. *Dialectología mozárabe*. Madrid: Gredos, 1983; Cagigas, Isidoro de las. *Minorías étnico-religiosas . . .*; Aillet, Cyrille; Penelas,

- Maite ; Roisse, Philippe, eds. *¿Existe una identidad mozárabe? Historia, lengua y cultura de los cristianos de al-andalus (siglos IX-XII)*, Madrid : Casa de Velázquez, 2008 ; Fanjul, Serafin. *Al-Andalus contra España : la forja del mito*. Madrid : Siglo XXI, 2000 ; *Arte y cultura mozárabe : ponencias y comunicaciones presentadas al I Congreso Internacional de Estudios Mozárabes, Toledo, 1975*, Toledo : Instituto de Estudios Visigótico-Mozárabes de San Eugenio, 1979 ; Jover Zamora, José María, dir. *Historia de España*. Madrid : Espasa-Calpe, 1935.
- 24) Gómez de Castro, Alvar. *De las hazañas de Francisco Jiménez de Cisneros*, ed. José Oroz Reta. Madrid : Fundación Universitaria Española, 1984, p.124.
- 25) Hitchcock, Richard. *Mozarabs in Medieval and Early Modern Spain . . .* p.112.
- 26) Hernández, Francisco Javier. *Los cartularios de Toledo : catálogo documental*. Madrid : Fundación Ramón Areces, 1985 ; González Palencia, Ángel. *Los mozárabes de Toledo en los siglos XII y XIII*. Madrid : Instituto de Valencia de Don Juan, 1926 ; Beale-Rivaya, Yasmine. *Mozarabic : Culture Contact, Language and Diglossia in Medieval Toledo*. Los Angeles : University of California, Los Angeles (PhD. Dissertation), 2006.
- 27) Olstein, Diego Adrián. *La era mozárabe. . .* , p.78 ; Laliena Corbera, Carlos ; Utrilla Utrilla, Juan F., eds. *De Toledo a Huesca : Sociedades medievales en transición a finales del siglo XI (1080-1100)*. Saragossa : Universidad de Zaragoza, 1998.
- 28) Pons Boigues, Francisco. *Apuntes sobre las escrituras Mozárabes toledanas que se conservan en el Archivo Histórico Nacional*. Madrid : Viuda e hijos de Tello, 1897 ; Simonet, Francisco Javier. *Historia de los mozárabes . . .*
- 29) Peñarroja Torrejón, Leopoldo. *El mozárabe de Valencia . . .* ; Fierro, Maribel. “Al-Andalus en el pensamiento fascista español”, *Al-Andalus/España. Historiografías en contraste*, Manuela Marín, ed. Madrid : Casa de Velázquez, 2009 : 325-349.
- 30) Barceló, Carmen. “Mozárabes de Valencia . . .”, pp.260, 263.
- 31) Epalza, Mikel. “¿Hubo mozárabes en tierras valencianas? . . .”, pp.7-31.
- 32) Barceló, Carmen. “Mozárabes de Valencia . . .”, p.260.
- 33) Peñarroja Torrejón, Leopoldo. *El mozárabe de Valencia . . .*
- 34) Hitchcock, Richard. *Mozarabs in Medieval. . .* : 70-71.
- 35) Hitchcock, Richard. *Mozarabs in Medieval. . .* : 71.
- 36) Hitchcock, Richard. *Mozarabs in Medieval. . .* , p.72.
- 37) Hitchcock, Richard. *Mozarabs in Medieval. . .* , p.72.
- 38) Hitchcock, Richard. *Mozarabs in Medieval. . .* , p.72.

- 39) Chalmeta, Pedro. “Mozarabes”. . . , p.247.
- 40) Hitchcock, Richard. *Mozarabs in Medieval*. . . , p.73.
- 41) Oliver Pérez, Dolores. “Los arabismos en la documentación del reino de León (siglos IX-XII)”, *Orígenes de las lenguas romances en el reino de León siglos IX -XII*, Ángeles Libano Zumalacárregui, ed. León : Archivo Histórico Diocesano, 2003, p.133.
- 42) Hitchcock, Richard. *Mozarabs in Medieval*. . . , p.74.
- 43) Olstein, Diego. *La era mozárabe*. . . , p.78.
- 44) Hitchcock, Richard. “¿Quiénes fueron los verdaderos mozárabes? . . .”, p.579.
- 45) Hitchcock, Richard. *Mozarabs in Medieval*. . . , pp.112-113.
- 46) Molénat, Jean-Pierre. “Mudéjars et Mozarabes à Tolède du XIIIe au XVe siècles”, *Minorités religieuses dans l’Espagne médiévale*, Manuela Marín, Joseph Manuel Martin, eds. Aix-en-Provence : Édisud, 1992, p.144.
- 47) Molénat, Jean-Pierre. “L’Arabe à Tolède, du XIIe au XVIe siècle”. *Al-Qantara*, 15/2 (1994), pp.473-496.
- 48) Molénat, Jean Pierre. “L’Arabe à Tolède. . .”, p.478.
- 49) Beale-Rivaya, Yasmine. “On the Relationship between Mozarabic Sibilants and Andalusian Seseo”. *e-Humanista*, 14 (2010), pp.40-56 ; Ferrando Frutos, Ignacio. *El dialecto andalusí de la marca media : Los documentos mozárabes toledanos de los siglos XII y XIII*. Saragossa : Universidad de Zaragoza, 1995.
- 50) Molénat, Jean Pierre. “Mudéjars et Mozarabes. . .”, p.144.
- 51) Molénat, Jean Pierre. “L’Arabe à Tolède. . .”, p.482.
- 52) Molénat, Jean Pierre. “Mudéjars et Mozarabes. . .”, p.145.
- 53) Molénat, Jean Pierre. “L’Arabe à Tolède. . .”, p.485.
- 54) Colbert, Edward P. *The Martyrs of Córdoba (850-859) : A Study of the Sources*, Washington, D. C : The Catholic University of America Press, 1962, pp.22-23.
- 55) Hitchcock, Richard. “¿Quiénes fueron los verdaderos mozárabes? . . .”, p.575.
- 56) Pons Boigues, Francisco. *Apuntes*. . .
- 57) Pons Boigues, Francisco. *Apuntes*. . . , p.4-5.
- 58) Pons Boigues, Francisco. *Apuntes*. . . , p.5.
- 59) Pons Boigues, Francisco. *Apuntes*. . . , p.5.
- 60) Chalmeta, Pedro. “Mozarabes”. . .
- 61) Simonet, Francisco Javier. *Glosario de voces ibéricas y latinas usadas entre los mozárabes*, Madrid : Ediciones Atlas, 1888.
- 62) エルヴォワは、ポルトガルで見つかった文書群にもシモネットの用語集と類似した単語群が現れるが、しばしば綴りが異なっていると述べている。Ur-

- voy, Marie-Thérèse. “Note de philologie mozarabe”, *Arabica*, 36/2 (1989), pp.235-236.
- 63) Galmés de Fuentes, Álvaro. *Dialectología Mozárabe*. Madrid: Gredos, 1983; Vespertino Rodríguez, Antonio. “Don Á. G. de F. (1926-2003)”. *Aljamía*, 15 (2003), pp.41-60.
- 64) Hitchcock, Richard. *Mozarabs in Medieval*. . . , p.62.
- 65) Hitchcock, Richard. *Mozarabs in Medieval*. . . , pp.63-64.
- 66) Oliver Pérez, Dolores. “Los arabismos en la documentación . . .”, pp.106, 107.
- 67) Penny, Ralph. “Continuum Dialectal y fronteras estatales: el caso del leonés medieval”, *Orígenes de las lenguas romances en el reino de León siglos IX-XII*, José María Fernández Catón, ed. León: El Archivo Histórico Diocesano de León, 2003, I, p.566.
- 68) Oliver Pérez, Dolores. “Los arabismos en la documentación. . .”, pp.138-39.
- 69) Urvoy, Marie-Thérèse. “La culture et la littérature arabe des chrétiens d’al-Andalus”, *Bulletin de littérature ecclésiastique*, 92 (1991), p.259.
- 70) Galmés de Fuentes, Álvaro. *Dialectología mozárabe*. . .
- 71) Glick, Thomas. *Islamic and Christian Spain in the Early Middle Ages*. Princeton: Princeton University Press, 1979, p.176; Menocal, María Rosa; Scheindlin, Raymond P.; Sells, Michael Anthony. *The literature of Al-Andalus*. Cambridge: Cambridge University Press, 2000; Solà-Solé, Josep Maria; Armistead, Samuel G.; Silverman, Joseph H. *Hispania Judaica: studies on the history, language, and literature of the Jews in the Hispanic world*, Barcelona: Puvill, 1980; Monroe, James T. *Hispano-Arabic poetry: a student anthology*, Berkeley: University of California Press, 1974.
- 72) Simonet, Francisco Javier. *Glosario*. . . , p.188.
- 73) Arié, Rachel. “Les minorités religieuses. . .”, p.52.
- 74) Glick, Thomas. *Islamic and Christian Spain in the Early Middle Ages*. . . , p.34.
- 75) Arié, Rachel. “Les minorités religieuses. . .”, p.53.
- 76) Hitchcock, Ricard. *Mozarabs in Medieval*. . . ; Aillet, Cyrille; Penelas, Maite; Roisse, Philippe, eds. *¿Existe una identidad mozárabe?. . .*; Marin, Manuela, ed. *Al-Andalus/España. Historiografías en contraste. Siglos XVII-XXI*. Madrid: Casa de Velázquez, 2009.

[解題]

モサラベについては、我が国の歴史学界ではこれまでほとんど研究が行われてこず、未開拓の領域となっている。本論文は、スペイン学界の状況を中心にモサ

ラベという言葉が帯びる多様な意味合いやその変遷、またモサラベの虚像と実像について様々な角度から論じたものであり、モサラベという研究分野の現在に至るまでの研究状況を把握する上で有用な論文として、今回翻訳と紹介を試みた。著者のヤスミン・ビール＝リヴァヤは、2006年にカルフォルニア大学ロサンゼルス校においてスペイン言語学 Hispanic Linguistics の博士号を取得し、現在はテキサス州立大学教授の職にある研究者である。彼女は中世のイベリア半島をフィールドに、ロマンス語とセム系言語の境界地域における言語の接触、交換、借用といったテーマを専門としており、本論文も、狭義の歴史学研究者が触れる機会が少ない、言語面からの詳細な分析が行われているのが特徴である。とはいえ、本論文は言語や史料の面からの検討が中心であり、モサラベというテーマに一層の関心がある方には、本論文の註に示された文献、また下記の文献も参照されることをお勧めしたい。

- ・ K. B. ウルフ (林邦夫訳) 『コルドバの殉教者たち－イスラム・スペインのキリスト教徒－』 刀水書房, 1988 年。
- ・ 安達かおり 『イスラム・スペインとモサラベ』 彩流社, 1997 年。
- ・ 林邦夫 「シスナンド・ダビーデイス 十一世紀スペインの一貴族の生涯」, 木村尚三郎編『学問への旅 ヨーロッパ中世』 山川出版社, 2000 年, 40-58 頁。
- ・ 田辺加恵 「アルフォンソ 6 世のトレド再植民事業－モサラベに付与されたフェエロの分析を通して」 『HISPANICA』 51 号, 2007 年, 149-168 頁。
- ・ 久米順子 『11 世紀イベリア半島の装飾写本：“モサラベ美術” からロマネスク美術へ』 中央公論美術出版, 2012 年。
- ・ 伊藤喜彦 『スペイン初期中世建築史論：10 世紀レオン王国の建築とモサラベ神話』 中央公論美術出版, 2017 年。
- ・ Manuel Rincón Álvarez, *Mozárabes y Mozarabías*, Ediciones Universidad Salamanca, 2004.
- ・ Francisco J. Hernández & Peter Linehan, *The Mozarabic Cardinal: The life and times of Gonzalo Pérez Gudiel*, SISMELE-Edizioni del Galluzzo, 2004.
- ・ Cyrille Aillet, *Les Mozarabes: Christianisme, islamisation et arabisation en Péninsule Ibérique (IXe-XIIIe siècle)*, Casa de Velázquez, 2010.
- ・ *Actas del I congreso internacional: Los mozárabes: Historia, cultura y religión de los cristianos de Al-Andalus*, Almuzara, 2018.